ふるさと再見

第一部　猿橋物語

読売新聞（昭和５７年４月から５月１日まで１９回連載）

ふるさと再見

第一部・猿橋物語

<1>

先人たちの遺産――。それは私たちの心を温かく包み、日々の暮らしを支える。コンピューターや原子力、遺伝子工学など、まばゆいばかりの最新の科学技術に比べて、それは一見、古ぼけ、地味でやぼったい。だが、ワラぶき屋根のすまいが、冬温かく、夏涼しいように、永い歴史をくぐり抜けて来た遺産は、郷愁を誘うと同時に今も役立ち、学ぶべきことが多い。それなのに、この遺産が次第に姿を消している。時代といえばそれまでだが、それでいいのだろうか。いま架け替えが進む「猿橋」を手始めに考えてみたい。

富士山のわき水を集めた桂川は、東北へ約三十㌔流れ、大月市内で笹子川、葛野（かずの）川と合流する。山あいの激流は、すでに大河となって、ゆったり流れ、広い河原には山から運ばれてきた大小無数の石が転がっている。

間もなく、この桂川の横相が一変する。その昔、富士山から流れ出たときれる溶岩が川を押しつぶすように高さ三、四十㍍の断がいをつくり、渓流は急に水かさを増して青くよどむ。両岸はケヤキの大木やツタ、カズラなどで昼なお暗く、ちょっと深山幽谷の趣を見せる。名勝・猿橋はここにある。

長さ十七間（約三十㍍）、幅十八尺（約五・五㍍）の木橋。深い渓谷には一本の橋脚もなく両岸に埋め込んだ数本の巨木の上に乗っている。日本三奇橋の一つとされるゆえんである。

橋の南詰めに一軒の茶店がある。看板は「大黒屋旅館」。経営は何人か代わったが、江戸から三百年のノレンは続いている。

当主は佐藤栄子さん、明治最後の生まれで七十歳。「大黒屋のおばあちゃん」で通る。都留の農家から嫁いで五十年。猿橋の朝夕、四季を見続けてきた。

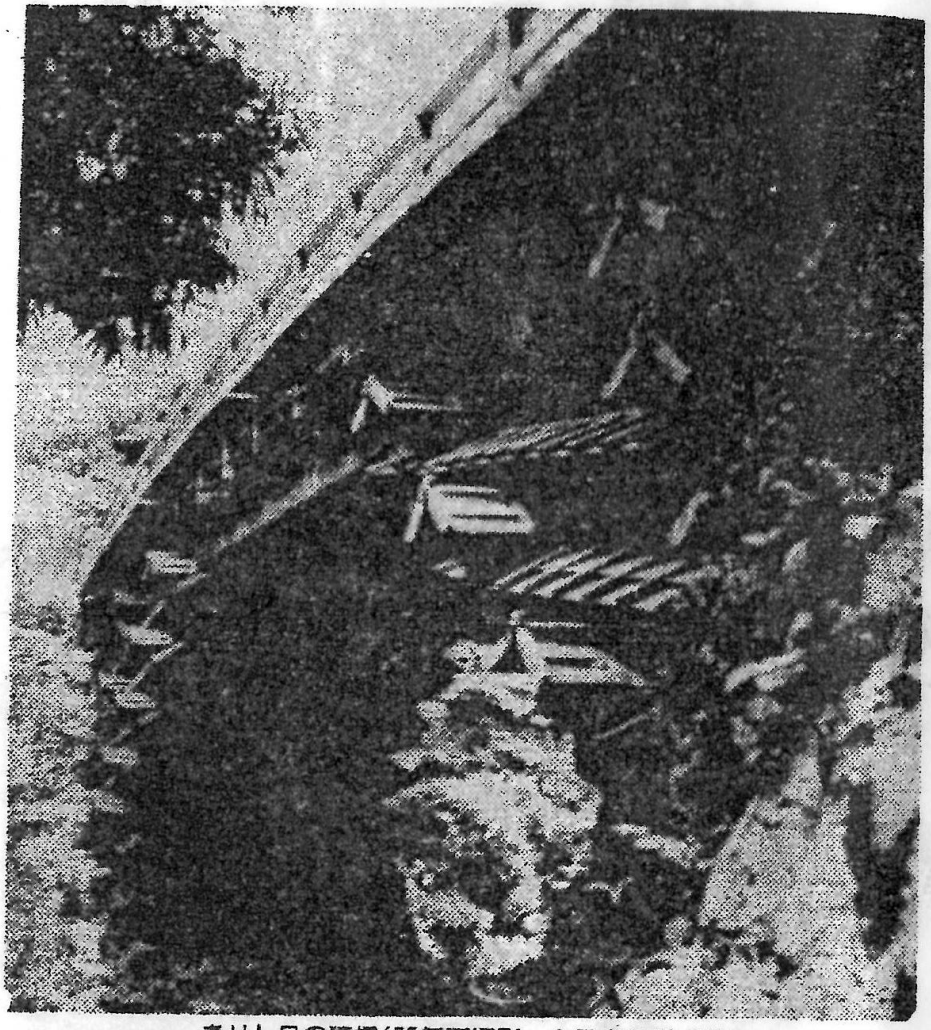
その猿橋も、三十年ぶりの架け替え工事のため、一月に解体・撤去され、今はその姿がない。ポッカリと穴の開いたような気持ちといいながら、おばあちゃんは語る。

「雪の朝、桜や新緑のころ、いつ見てもいい。でも、橋の上

大黒屋旅館

第一回　続き

三百年続いた〝しにせ〟



ありし日の猿橋（55年夏撮影、大月市教委提供）

名物は手打ちの「忠治そば」

から眺める紅葉が、やっぱり一番いいですねェ」

ここの名物は手打ちの「忠治そば」。先代の嘉兵衛さんが始めた。そば粉が多くて、太い。田舎風の味付けが秘伝となっている。

名前の由来は、ご存じ国定忠治。ある時、代官所破りの忠治がしばらく大黒屋に投宿、身を隠していた。やがて役人に見つかったが、猿橋から桂川に飛び込み、上流の阿弥陀寺（現存せず）にいた子分の連絡、仮割の浅太郎らと落ち合い、逃げのびたとのエピソードが残っている。事実、大黒屋には忠治が置いていったといわれる裏ろう、弁当箱、きせるなどがある。

この忠治そば、猿橋とともに噂（けん）伝され、甲州街道を往来する人々に愛された。戦後も三十年代あたりまでは、富士方面に向かう観光バスが立ち寄り、結構な繁盛だった。が、四十四年春、中央道が河口湖まで開通、甲州街道が裏通り化するとともに客足が落ち始めた。

川の対岸には「小松屋」「坂下屋」などの旅館、茶店があったが、相次いで廃業。三百年の大黒屋も例外ではなかった。やむなく旅館業の方を手控え、忠治そばを持ってその中央道に殴り込みをかけた。

いま、相模湖―大月間の藤野パーキングエリア（上下二か所）に忠治そばのノレンがかかる。コクのある山菜そばなどは出せないが、一日ざっと千五百食。街道の旅人ならぬハイウエーのドライバーたちにも〝忠治〟はなかなかの人気である。

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

大黒屋旅館

おばあちゃん、観光客へ訴え

木造の橋にと署名集め

<2>

さるはしや　蠅（はえ）も居の　笠の上　　作者不詳

苦業の作との説もあるが、句碑はなく、さだかではない。橋から水面まで約三十㍍。吸い込まれるような恐怖をハエの心情に託したもので、猿橋をよく表現した名句とされている。

もっともこの怖さもとりようで、猿橋はありがたくない代名詞をちょうだいした時代もある。つまり〝自殺の名所〟。

大黒屋のおばあちゃんが語る。

「もう随分前の川開きの日でね、橋はゴッタ返していた。その中にどうも様子のおかしい女性がいる。『あなた、どうしたの』と店を飛び出したら、ドッ、ブーン。当時は水量が多くて、水しぶきが橋の上まで。病気と失恋からとか。お気の毒でした」

〝自殺の名所〟はやがて上流にできた別の橋に移り、猿橋は汚名を返上できた。

そんな暗い思い出は別にして、大黒屋に出入りする人々も時代とともに変わった。甲斐絹の集産地として市が立った昭和初めごろまでは、手織りの羽織地を担いだ近在の農家のだんな衆が立ち寄り、ひと休み。終戦直後は進駐軍の兵隊さんの常宿になった。十二、三年前の夏には原水禁運動の平和大行進がにぎにぎしく通っていった。

しかし、その足音を聞きながら、いつか昭和二十六年架け替えの猿橋は病んでいた。平和大行進が去って間もない四十八年に通行禁止。五十年の台風では橋の欄干が倒れ、おばあちゃんが針金で〝応急修理〟する騒ぎさえ起きた。

そんなある日、地元に妙な風聞が伝わってきた。「県と市が猿橋を永久橋にするらしい」

昔ながらの名橋「猿橋」と共に歩んできた大黒屋旅館の栄子おばあちゃん

と。もっとも永久橋なら、すぐそばに新猿橋（昭和九年完成）があり、その必要性はない。この〝永久橋構想〟は関係当局も否定し、どうやら幻の話だが、当時の地元は知る由もない。

「鉄とコンクリートの橋なんて、とんでもない。猿橋でなくなってしまう」。おばあちゃんは署名集めを思い立ち、店に一冊のノートを置いた。

五十三年から始まるそのノートには、全国各地からきた観光客の署名がズラリ。「一日も早く架け替えを」「せひ木造の橋で」などの添え書きも見える。ただ、この〝署名簿〟が役所に提出される前に架け替えが本決まりになった。

「橋ができたら、当時の人たちに知らせてあげなくちゃ」。猿橋の観光ガイド兼管理人のおばあちゃんは厭託なく笑った。

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

猿橋中の生徒 学習記録残す

<3>

郷土歴史クラブ

調査研究や清掃

名勝・猿橋の荒廃化に心を痛め、早急な架け替えを訴えた人がほかにもいた。地元猿橋中の生徒たちだ。

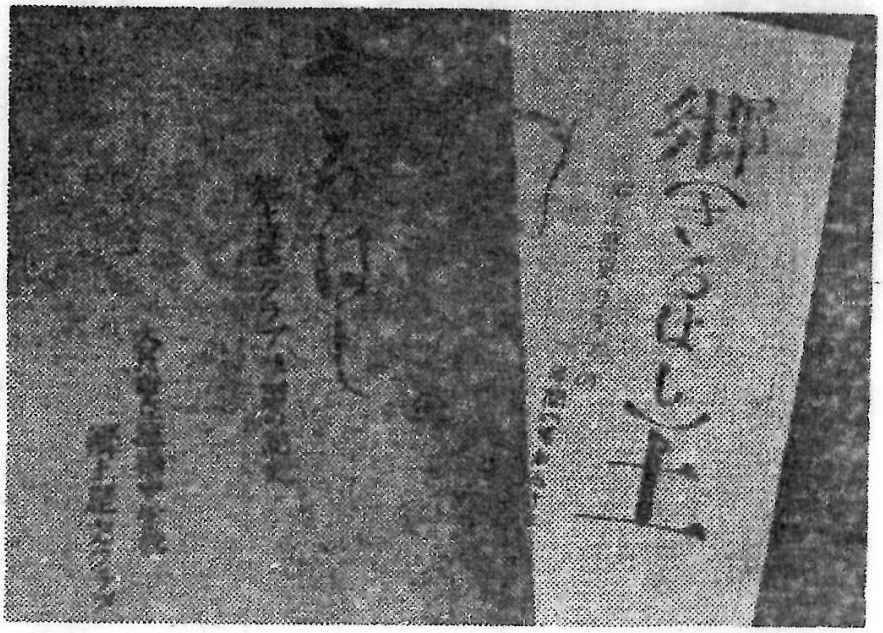
学校は昔の北都留郡役所跡に建つ。校歌の石碑を降りると、そこが猿橋。校歌にも〈古きゆかりの　かけ橋の　下にたたえし　桂川……〉とうたわれている。切っても切れない関係にありながら、実はあまりに身近過ぎて猿橋に目を向けることが少なかった。

それが五十二年、県の「社会参加学校クラブ活動事業」の指定校になり、学校内に郷土歴史クラブが誕生したのがきっかけで、生徒たちの見る目は変わった。

地元の史跡、文化財調査に乗り出した四十人のクラブ員らの目に映ったのは、すでに通行禁止のロープが張られ、ボロボロの橋板をきらす猿橋だった。

さっそく、橋の由来やら構造、規模などの調査研究を進めるかたわら、毎週一回、登校時に橋のたもとの清掃奉仕を始めた。落ち葉がたまっては橋の腐食を早める。だから橋の上こそ掃除したいが、入れない。そんなもどかしさも手伝って、ある日、一人の男子生徒がそっとロープをくぐり、橋板を踏みはずし、あわやという事故が起きた。クラブ員らはお目玉を食らったが、はからずも猿橋の傷みが予想以上に進んでいることがわかり、市教委などに衝撃を投げた。

やがてクラブ員たちは「清掃奉仕だけでは事態が解決しないことに気づいた。「文化財を守ろう」とのポスターを街の各所に張り出すとともに、学習記録「さるはし」（五十三年三月）をまとめ、各方面に配布した。



一人の女子生徒がその中で書いている。「もし橋が落ちたら、私たちの学校はどうして『猿橋』なのか、次の世代の人たちにはわからなくなってしまう。名ばかりではありません。日本三奇橋の一つを失い、郷土の人たちが残してくれた、お金で買えないものも失います」

生徒たちの叫びは市教委を動かし、やがて県、文化庁を動かし、翌五十四年に架け替えが決まった。

当時のメンバーは学校を去ったが、橋の清掃は生徒会に引き継がれ、いまも続く。その活動を見守りながら、この三月で退官した前校長の知見勝雄さんは、つい先日の最後の卒業式でこんなはなむけの言葉を贈った。

「君たちはゆかりのある古い土地に生まれた。どこに行っても郷土を忘れないで……」と。

猿橋中の郷土歴史クラブがまとめた学習記録「さるはし」

ふるさと猿橋

第一部・猿橋物語

<4>

構築、猿にヒント

奇橋に秘める〝大陸の発想〟

橋のたもとに宝暦五年（一七五五）建立の石碑がある。江戸の文人、鶴鳳郷の選とされる碑文は、次のような文句で始まる。

「我が大日本橋梁ノ奇ナル者 屏防ノ算橋 岐蛇ノ懸橋 峡ノ猿橋 是レノミ……」

屏防の算（そろばん）橋とは、半月五連の橋げたで有名な錦帯橋（山口県岩国市）。岐蛇（きそ）の懸橋は、中山道の名所・木曽の桟（かけはし）だが、さる四十一年の道路拡幅で姿を消した。峡（かい）の猿橋は、いうまでもなくわが甲斐の猿橋。現存する錦帯橋と猿橋が国の名勝に指定されている。

日本三奇橋の由来は、この辺にあるようだが、猿橋を有名にしたのは、その構造。両岸に栖（はねき、刎木とも書く）と呼ばれる直径五十㌢余の巨木を埋め込み、少しずつ突出にせり出していき、その上にさらに大い橋げたを渡す。橋を建てにくい地形にマッチした奇抜なアイデア。いつ、だれが考え出したものか。

山梨国語教育研究会編の「山梨のむかし話」（五十年刊）にこんな民話が紹介されている。

推古の帝の御世、百済（いまの韓国）から来た道興博士の志羅呼（しらこ）という人が、都から架橋に派遣されてきた。谷の長さ、深さがともに十七間（約三十㍍）、水深もかなりあって、苦心して架けた橋は何回も流された。そんなある日、たくさんの猿が群れ集まり、ツタやカズラを使いながら、前足で次の猿の後ろ足をつかみ、だんだんと伸ばして、ついに向こう側とつながり、その上を白い大きな猿が渡った。これを見ていた志羅呼は「そうだ、これだ」と……。

推古の御世といえば七世紀初め。この民話を裏付ける何らの史料もない。が、この「志羅呼伝説」は、かなり昔から地元に伝わっていたらしく、橋のたもとの石碑にもその記述が見える。

今回の架け替えにあたって、猿橋の歴史を研究している地元大月市の大沢良作さんは、この「志羅呼伝説」の根強さに改めて驚いた。そして桂川、葛野川など猿橋と縁の深い川の名称が、帰化人の本拠地・山城（いまの京都）にもあることから「創架の時代はともかく、猿橋の奇構は帰化人が持ち込んだ〝大陸の発想〟ではないか」と見る。

橋の奇構から移世の人々が連想した作り話、と一概に決めつけられない何かがあるというのだ。

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

＜5＞

決着つかぬ文献

地名が先か 橋が先か……

生い立ちは伝説のかなたにあって、ようとして知れない猿橋。だが、中世にはいると各種の文献、史料にその名が登場するようになる。

最も古いのは、南都留郡大嶺村（いまの足和田村）の蓮華寺仏像名にある「嘉祿二年（一二二六）、仏所加加守 猿橋 住人なり」との記述。もっともこれだけでは橋があったのか、単なる地名なのか不明。「地名が先か、橋が先か」の論議は、いまだに決着を見ない。

十五世紀、室町時代になって有名な〝猿橋合戦〟が起きる。

応永二十三年（一四一六）、当時の甲斐国守武田信満は、しゅうとにあたる関東管領上杉氏憲（禅秀）から鎌倉公方（くぼう）足利持氏を討つべしとの密使を受けて兵を挙げた。甲斐の国守とはいってもさしたる兵力もない武田方は、それでも討手の上杉憲宗の大軍と、天然の要害・猿橋をはさんで二年間も戦った。（東京彦著「伝説と怪談」から）

これは鎌倉大草紙などに見える戦記で、十年後の応永三十三年には「一色刑部大輔持氏一千騎にて発向したが、武田 信長（信満の息子）、猿橋にて防ぎ、持氏旗を巻く」との趣旨の記述もある。

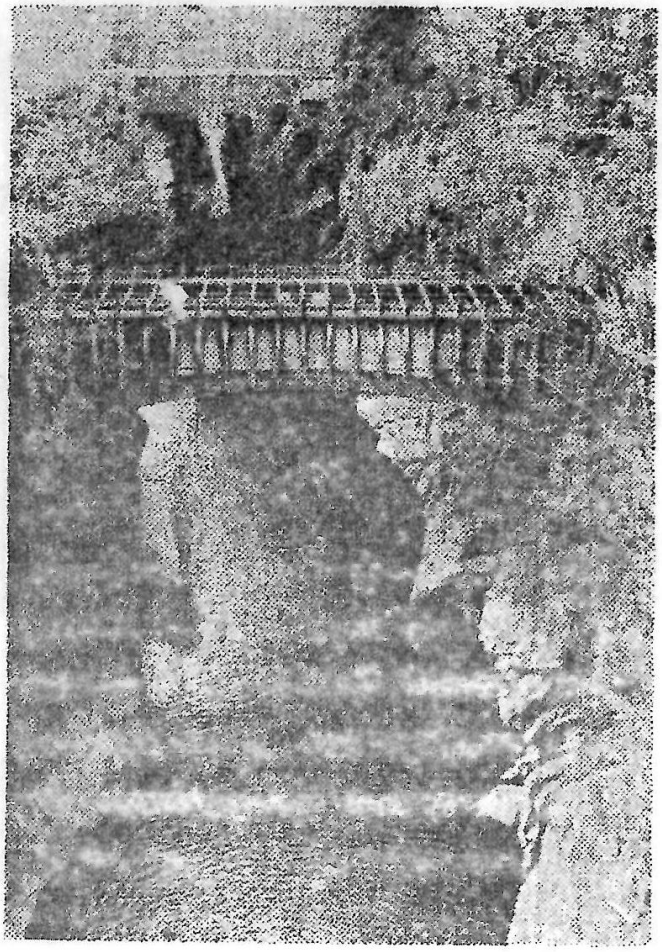
「甲斐は山けわしく、谷が深い。軍兵はいずれ劣らぬ猪武者」（同書）と幕府方をおそれさせた猿橋合戦からほぼ百年後。享禄三年（一五三〇）には、上杉憲房との一戦に、武田信虎（信玄の父）が小山田越中守信有ら一万八千騎を猿橋に集結させたとも伝えられている。

甲州の要路、猿橋は昔から合戦の舞台だった。そのころには単なる地名でなく、橋がかかっていたことが、次のような史料で裏付けられる。

応仁の乱後の文明十八年、聖護院道興が東国巡歴の折に記した旅日記「回国雑記」には「猿橋とて川の底千尋（ちひろ）に及び待る上に三十余丈の橋を渡して待りけり。この橋に種々の説あり。昔、猿の渡しけるなど里人の申し待りき……」とある。この時、道興は橋詠かの歌を残している。その一首。

谷深き　そはの岩ほの　猿橋は　人も梢を　渡るとそみる

もっとも当時の猿橋がどんな形の橋だったのか、うかがい知るすべもない。いまの奇抜な構造が明らかになるのは、ずっと後の江戸時代になってからである。



猿橋付近の桂川渓谷。その昔は合戦の舞台にもなった（現在の甲州街道・新々猿橋から撮影）

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

修理の記録克明

旧家から古文書
職人の賃金まで

<6>

中世の史料として評価の高い「妙法寺記」の記述が、大月市史に紹介されている。

武田信玄が生まれる前年の永正十七年（一五二〇）三月、小山田越中守信有が猿橋を架けた。現在よりやや上流で、桂川が最も狭くなる部分だった。

木造の橋のこと。何十年に一回かは、当然架け替えが行われたと推定される。甲斐の金山研究で知られる奥富彦氏（甲府市在住）が数年前、東京・多摩地区でみつけた「奥川金山再掘願」という古文書には、奥津河内守（駿河大納言徳川忠長の用人）の時代、元和年間（一六一五―一六二四）の架け替え工事に丹波村の金掘りたちが加わったとの興味深い記述がある。ただ橋の構造や工事の模様などを伝える記録はこれまでなかった。

五十三年十一月。地元に猿橋架け替えの機運が高まる中で、大月市教委は恒例の文化財展を「猿橋展」と銘打って開いた。将来の架け替えに備え、埋もれている猿橋関係資料が出て来ることを期待したのだ。

そのねらいは当たった。橋近くの奈良家（酒店）から三点の古文書が寄せられた。寛永から明治にかけての出来形帳（完工報告書）や修理帳の控えだった。

その一つ、寛永四年（一八五一）と記された「甲州道中猿橋宿地内字大猿橋掛替御普請出来形帳」を解読して、市教育長

架け替えの陣頭指揮にあたる市教育長の大沢さん

の大沢良作さん（六六）は驚いた。内容は次回で詳しく紹介するが、それには架け替えの工期はもちろん、桁（はねぎ）や桁（けた）など各部分の建材の寸法、数量から職人らの賃金までが克明に記録されていた。

その後、地元の旧家から文政九年（一八二六）の出来形帳、安永六年（一七七七）の出来形帳などが相次いで発見された。それぞれの出来形帳にはその前の架け替え、修理のいきさつが記録されており、架け替えの歴史は、具体的な資料によって宝暦八年（一七五八）までさかのぼって裏付けられた。

それによると、猿橋は二十年程度に一回ずつ架け替えがあり、その間に修理が行われてきた。また桁を両岸に埋め込んだ構造が、何代も何代も踏襲されてきた様子もうかがえる。

「昔の人たちが苦労して残してきたものを、いま妙な橋に変えたら、寝ざめが悪いですよ」

子供のころ、関東大震災にもビクともしなかった猿橋を見て「日本一丈夫な橋」と誇りに思った大沢さん。いま架け替えの責任者として感慨深げである。

架け替えの記録 ❶

<架け替えの歩み>

（大月市教委調べ）

宝暦8年（1758年）	架け替え	
明和3年（1766年）	（修　理）	
安永6年（1777年）	架け替え（出来形帳あり）	
天明8年（1788年）	（修　理）	不　明
寛政3年（1791年）	架け替え	不　明
享和2年（1802年）	架け替え	不　明
文化11年（1814年）	（修　理）	
文政9年（1826年）	架け替え（出来形帳あり）	
天保8年（1837年）	（修　理）	
嘉永4年（1851年）	架け替え（出来形帳あり）	
明治5年（1872年）	（修　理）	
〃 33年（1900年）	架け替え	
昭和24年（1949年）	架け替え	

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

<7>

嘉永に突貫工事

農閑期を利用、6万人動員

嘉永四年（一八五一）の出来形帳から、当時の猿橋架け替えの模様をもう少し紹介してみよう。

工事は嘉永三年十一月中旬に始まり、翌四年四月に完成している。麦まきを終え、田植えにかかるまでの農閑期、渇水期を利用したらしいが、工期わずか五か月、大変な突貫工事といえる。

橋に使われた木材はケヤキ、杉、クリ材で、大小四百九十本。橋を支える桁（はねぎ）は片側が上下四段、二並びの八本。長さは六間半（十二メートル弱）から九間（十六メートル強）で、上にいくほど長い。いずれも一尺八寸（約五十四センチ）角。桁と桁に渡す中央の橋桁（けた）は三本で、一番大きいものは長さ九間、二尺（約六十センチ）角という巨木だった。

これらの木材は、小金沢山（現在の大月市梁瀬付近）と鹿留山（都留市朝日付近）の入会地から切り出された。

「御普請場より瀬戸村吉姓入金山宇小金沢まで往来二千四里、一日六里歩行」（出来形帳）。この里は道の単位で、換算すれば片道約八キロ、それを二日がかりで運び出したことになる。道作り、運搬などで動員された人足は、実に延べ六万二千余人を数えた。

当時、人足には雇われた"賃米（ちんまい）人足"と、近在から狩り出された"義務人足"があり、一日の賃金は前者が一日米一升七合（約二・五キロ）、後者が同七合五勺（約一・一キロ）だった。

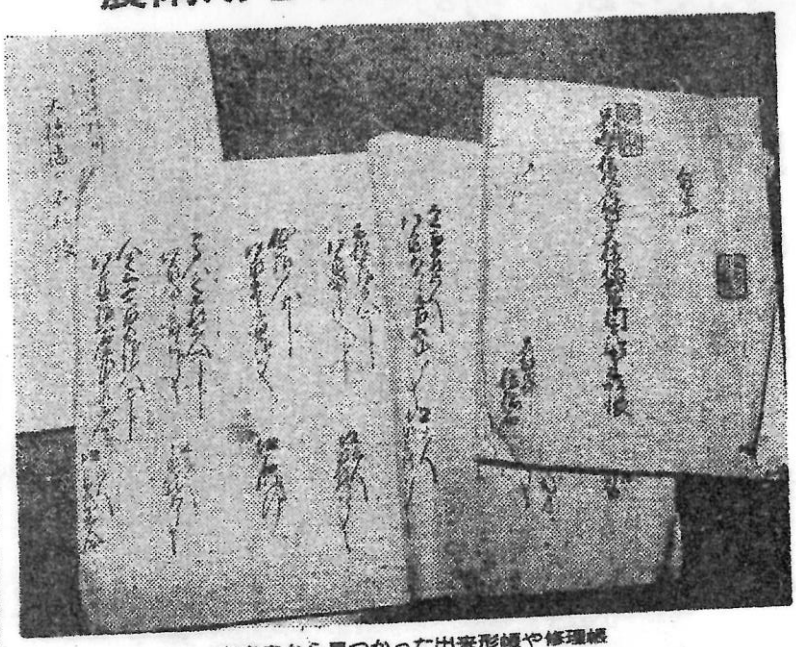
甲州街道は江戸五街道の一つ。要路の橋架け替えだけに幕府が大号令をかけたことは想像にかたくないが、のちに賃金不払いで村方が怒り、訴訟ザタになる。世にいう猿橋騒動と呼ばれるトラブル。解決したのは明治になってからである。

この嘉永四年の出来形帳ほど克明に架け替えの一部始終を書き残していた記録はない。今回の架け替えにあたって、大月市の修理委員会（委員長、小長治男市長）が設計の基礎資料に採用したことはいうまでもない。

これが保存されていた奈良家は、甲州街道沿いの宿に続いてきた古い酒屋。昭和十五年三月、猿橋一帯が大火に見舞われ、奈良家の大きな店や倉庫も焼け落ちたが、この出来形帳は残った。

「桐箱があって、大事なものが入れてあると教えられた記憶があります。火事の時、だれかが持ち出したのでしょうが、それがこんな形でお役に立つとは……」と当主の奈良雪子さん（五三）。

▽△　▽△



奈良家から見つかった出来形帳や修理帳

架け替えの記録

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

<8>

〝3代の渡り初め、今から楽しみに〟

明治の生き証人

おびただしい数の人間が汗を流した嘉永の猿橋は、明治維新をはさんで明治三十年代まで半世紀近い命脈を保った。それまでの橋が二十年前後の間隔で架け替えられてきた歴史を考えれば、大変に〝長寿〟だったことがうかがえる。

しかし、この〝江戸の遺産〟も時代の波には勝てなかった。日清戦争後の交通量の増加、とりわけ北富士の演習場へ向かう軍用車両の通行に、人馬の時代の橋は耐えられなかったのだろう。明治三十三年に架け替えが行われた。

この時の関係者は、もう世にいないし、なぜか詳しい架け替えの記録も残っていない。そんな中で、子供心ながら当時の工事の模様を見聞きした〝生き証人〟がいる。

北野光善（みつよし）さん。明治二十五年、猿橋生まれの八十九歳。左官職の仕事もやめ、隠居の身だが、いまも地元心月寺の名誉総代をつとめるなど、カクシャクたるものだ。

そのジイちゃんが語る。

架け替えの記録 ❸

「甲州街道からちょっと入った空き地（現在の猿橋出張所付近）に大人三人で抱えるくらいのケヤキ三本があっての。架け替え工事のためだろうが、一本を切り倒したら、その晩に大火があって町の中心部があらかた燃えてしまった。縁起が悪いっちゅうんで、そのケヤキは使わずにころがしてあった」

まだ当時は、街道筋や近在の山からケヤキ材が豊富に出たらしい。神宮が先頭に立ち、土車（木の輪に心棒を通したもの）に積まれた大木が街道を運ばれていく光景を、まだ小学生だったジイちゃんはよくおぼえている。

町の人たちを驚かしたのは、解体された前の橋（嘉永の橋）の古材だった。

「えらく太かった。近所の橋屋が払い下げてもらってな、タライを作ったなんて話もあった」

ともあれ、明治、終戦直後、そして今回と、三度の架け替えにぶつかった人は、もうジイちゃんくらいしかいない。

いまの計画では、新しい猿橋が完成するのは二年後の五十九年春になる。「ジイちゃん、それまではがんばってね」。近ごろは会う人、会う人からそんな励ましを受ける。

「うん、もう一度猿橋を見たいもんだ」。ジイちゃんの心は、晴れがましい〝三代の渡り初め〟に飛んでいるようだ。

新しい猿橋を心待ちする〝ジイちゃん〟こと北野さん

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

<9>

工法変えず拡幅

時は文明開化の世

北都留郡長が自負

架け替えの記録 ④

明治の架け替えで、猿橋は拡幅された。嘉永までの橋は桔（はねき）が二本並び、それが三本並びになった。幅は十一尺（約三・三㍍）から十八尺（約五・四㍍）に広がった。が、木造の奇構は継承された。

当時の北都留郡長、佐倉達山（本名・孫三）が、「猿橋記」という一文を残している。

「掛替を終わって　唯その美觀を尽さざるを恐る。当今鉄石の工ありといえども、この橋依然旧制を改めざるは　迂拙（うせつ）に似てさにあらず（中略）この橋奇を求めずして自ら奇なり（中略）故に古態を存して永く行客をして古を徴して今に觀がしむ　是所謂（いわゆる）一挙両得也」。

時は文明開化の世。すでに鉄橋技術があったが、橋の奇構そのものに価値があるとして、工法を変えなかったことを自負している。この人、なかなかの文人郡長だったと見え、地元には書や詩文が残っている。

達山の心意気は、その後も引き継がれた。終戦直後の昭和二十四年から三年間にわたった架け替え。すでに当時、猿橋は国の名勝指定（昭和七年）になっていたが、隣に新猿橋（同九年）が完成、甲州街道の要所としての役目を終えていた。が、地元の人は、この奇橋を捨てなかった。

当時、猿橋町総務課長として架け替けに奔走した田中福次郎さん（六九）（大月市猿橋町）が語る。

「長い間の酷使で桔や欄干が腐れ、自然落下の危険さえありました。混乱と貧困の時代でしたが、見るに見かねて架け替えに踏み切ったものです」。

国、県の補助金やら地元の寄付金で五百万円余の費用は工面できた。が、もう近在の山は枯れ、ケヤキの大木などどこにもなかった。やむなく秋田杉を使うことになり、当時の中西建治町長（故人）と田中さんが、秋田・角館の日月神社に出向いて御神木の払い下げを交渉した。

「千数本の巨木が猿橋駅に着いた時、地元はもう大変な騒ぎ。稚児行列まで繰り出したものです」。田中さんは懐かしそうに振り返る。

工事も大変だった。設計を担当した県文化財保護審議委員の広瀬浄（いずみ）さん（七四）（韮崎市在住）が語る。「橋の資料といえば、安藤広重の絵くらいしかない。本当の形がわからない。仕方なく明治の橋を忠実に再現しました」。

名勝・猿橋が、戦車も通る時代の姿のままで残されたのは、こんな事情があった。

苦しい時代の架け替えを思い、感激深い田中福次郎さん

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

<10>

予想超す難工事

鳶の"三丁目の頭"

ヒナ型を作り特訓

深い谷間。そこに脚のない橋を架ける。まるで"空中ブランコ"のような難工事は、まさに鳶（とび）の独壇場だった。昭和二十四年の架け替えに活躍した一人の老仕事師のエピソードが残っている。

滝沢吉五郎さん。お隣の八王子市本町三丁目生まれ。つい先年、九十九歳の高齢で亡くなったが、現役の時は"三丁目の頭（かしら）"と呼ばれ、サーカスの小屋掛けや、神社仏閣修理の足場作りはお手のものだった。

架け替え工事の元請け人は地元猿橋の親方で、当時八王子市方町にいた別の組頭に相談を持ち込んだが、「そりゃ、吉五郎さんででもなきゃ、できないワ」。

「私なんか、ジイさんから見ればお稚っ子でしたわ」。同市追分町の組頭、尾股惣司さん（全）が、当時吉五郎さんから聞いた思い出話を語る。

戦争直後のことで、年寄りか経験の少ない若者しかいなかった。まして宙ぶらりんの"つり足場"を知る者などまったくいなかった。

吉五郎さんは、ハギのくきと細い針金を使って足場のヒナ型を作り、若い者に丸太の組み立て方を特訓した。

それでも、いざ現場にはいると、予想以上の難工事だったらしい。「平場（平地）と違ってね、丸太一本渡すにもロープでつり、何人もの手でたぐり寄せる。そりゃまあ、四、五日は火事場のような騒ぎだったで……」。後日、吉五郎さんは述懐していたという。

その後、尾股さんは、そんな仕事師の世界を「ある鳶職の記録」（四十七年、ふたん記全国グループ刊）という一冊の本にまとめた。猿橋架け替えの苦労話を紹介する中で、吉五郎さんを"足場の神様"と書いたら、まだ元気だったジイさんは相好を崩した。ただ、「業師（どうみや、神社仏閣のこと）と違って、橋にゃ屋根がないからねェ」と、苦労した橋がいつか朽ち果てていくことをさびしがっていたという。

最近、ひょんなことから吉五郎さんの作ったヒナ型（縦四十五㌢、横十二㌢、高さ四十㌢）がまだ健在とわかり、尾股さんが預かった。

「伏せ図（平面図）も起こし図（立体図）もロクに書けない人だったが、永年のカンというのか、実によくできている」。

三十年ぶりの架け替えが進む時に偶然出てきた昔のヒナ型。ジイさんの声が聞こえるようで尾股さんは胸が熱まった。

吉五郎さんの作った足場のヒナ型を懐かしそうに見る尾股さん

架け替えの記録 ⑤

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

<11>

幽谷の桂川と一心同体

橋あっての渓谷美

猿橋の架け替えは、腐朽がひどくて〝通行禁止〟の措置がとられた四十八年、地元大月市の文化財等調査委の提案で一度は具体化した。費用は当時の試算で一億五千万円。しかし、折り悪しく石油ショックにぶつかり、計画は流れてしまった。

それから六年。橋のたもとからうめき起こった「猿橋を守れ」の声に押され、昭和で二度目の架け替えが本決まりになった。

五か年計画。五十四年度が旧橋の腐朽度調査など。五十五年度に仮橋の建設、五十六年度に旧橋の解体、基本設計と進み、今年度からようやく新橋工事にはいる。完成は二年後の五十九年春になる。

総工費四億五千万円は、国が二分の一、県と市が四分の一ずつを負担するが、六年間の運れでコストは三倍にはね上がった。前回二十四年のざっと九十倍である。

ここで名勝・猿橋の意味を、少し紹介しよう。昭和七年三月、国の名勝指定を受けた時の文書には「猿橋及びその周辺の渓谷」とあり、橋と一緒に桂川渓谷（橋の上流百㍍、下流七十㍍）が名勝となっている。ただ、天下の奇橋も、重要文化財に指定されたことはついぞない。

今回の架け替えにあたって、庭園、自然景観の専門家として市の修理委員会に加わった吉川霈（まつ）日大農獣医学部教授に聞いた。

橋の価値もいろいろある。ひとつは構造物として橋そのものが重要文化財になっているもの。屋根付きの橋として知られる京都・東福寺の偃（えん）月橋、日光の神（しん）橋が代表例。

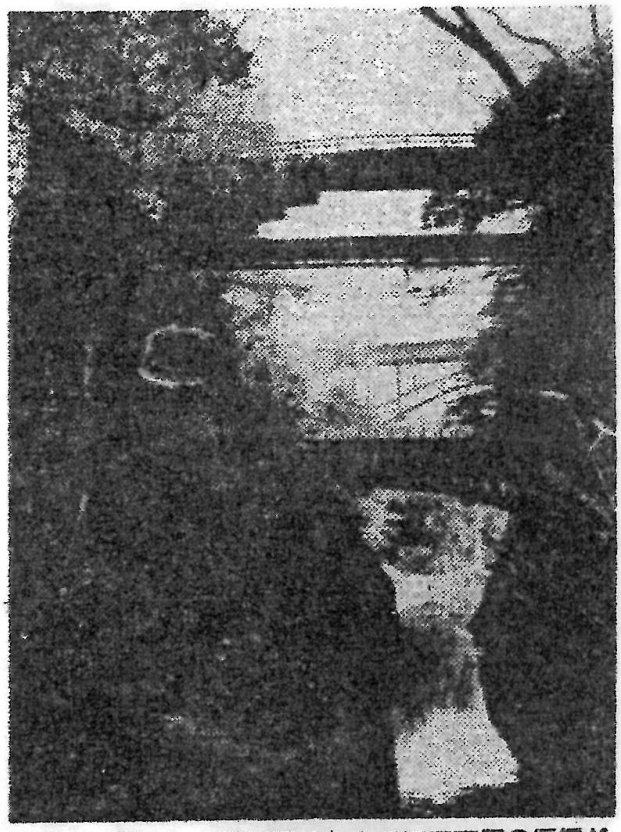
次は架け替えの行事、風習が民俗資料に指定されているものに、四国は祖谷（いや）のかつら橋がある。

最後が錦帯橋（山口県岩国市）と猿橋。ともに昔は主要街道の橋で、流失やら架け替えで建造物そのものの歴史的価値は薄い。が、その伝承された奇橋が周辺の景観に映え、名勝になっている。

つまり猿橋と、つかの間ながら深山幽谷の趣を見せる桂川渓谷は、持ちつ持たれつの間柄。だが、吉川教授は「いや、この程度の渓谷美なら他にもないわけではない。こと猿橋については、橋あっての渓谷美でしょうね」と語る。

自然景観の専門家が率直に脱帽する。名勝・猿橋はやはり橋で持つようだ。

名勝・猿橋を語る吉川教授



猿橋（一番上）と桂川渓谷、すでに工事用の仮橋が見える＝56年秋、大月市教委の水越康仁さん撮影

昭和の橋 ❶

ふるさと探訪

第一部・橋物語

<12>

実に見事な"構法"

構造力学上の傑作

岸谷教授も感嘆…

「これが考え出したものが始ちがいが、この橋は実にうまく出きている。田舎のものだが、こっちがいかになっちゃうくらい……」

ほう橋建設委員会のメンバーで、建設省の橋梁部分第一東大工学部長岸谷教授は橋の"構造"に感嘆する。橋梁の専門家の目からみただけで、橋の美観の部分を除く。

下の二つ（写真参照）はもっとたいしたものではない。が、ともあれ橋の重量は半分以上の部分が鉄筋（後ページ参照）。そして三、二、一の桁と出たり、長さにタテの部（おくはしの）部長に長さの差をもたせたという。

昭和三十四年、岸谷教授が橋梁の新構造を発表したその時、橋の部分をアスファルトで被覆したが、これが原因で土中の水分を吸いとって、腐蝕を早めたと専門家は見る。

「でも、橋は落ちなかったでしょう。新構造の橋だから腐蝕してもおかしくない状態。つまり、この橋の新構造は実証されたわけです」（岸谷教授）。

「中国地方に二つはないが、岸谷教授がもはや、橋梁の新構造を大胆に考える。

橋梁学者として未来の橋を見ている。ただ、中国のクリーク（河川の支流）に沿って、橋梁があったっきりで、今年三月、橋梁が流れ出て、多数の人と家畜の生命を奪ったが、「ついぞ聞いたことがない」との感嘆だったという。

「中国の、橋梁、は、新構造を橋で入ってきたんではないでしょうか。この橋、そのものを大胆な考えを持って用意に踏み、長い間に橋を掛けて、実だ"岸谷教授"と言えたでしょう」

たからこそ橋の新構造は橋梁なら、見とれ橋に対したと岸谷教授はそれ以の橋は考えた情熱を傾けるのだ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

橋の構造を説く岸谷教授

◇橋梁の側面図と断面図（森永の資料から作成。大月市教委提供）

（注）上から4、3、2、1の橋、縦が枕木、横線のあるのが枕木

昭和の橋

明治の橋も寸足らず

〝嘉永の姿〟を採用

今回の架け替えにあたって、大月市の修理委員会は一つの重大な判断を下した。嘉永四年（一八五一）の出来形帳を基本設計に取り入れることになった。猿橋は明治三十三年の架け替えの時に拡幅され、前回昭和二十四年にもこの拡幅が踏襲されたいきさつはすでに紹介した。

これは甲州猿橋の[illegible]図が[illegible]にあったが、その資料[illegible]猿橋（昭和九年）、新編猿橋（昭和五十二年）と永久橋の〝猿橋〟などが相次いで刊行、猿橋は〝橋の実寸通り〟となった。「名勝の橋として保存する以上、古い文献にそうのが本筋」（文化庁記念物課）との意見もあり、百三十年前の姿に戻すことになった。つまり両岸の桁（はねぎ）は三本並び三本架けで、幅員は十八尺（約五・四四メートル）から十一尺（約三・三メートル）に。

古い文献といえば、嘉永より以前の文政九年（一八二六）や安永六年（一七七七）の出来形帳もある。が、いずれも記録にあいまいさがあり、正確な寸法を読み取ることはできなかった。

こうして〝嘉永復元〟は決まったが、ここで思わぬ問題が起きた。嘉永の出来形帳と、今年二月解体した前の橋を比較すると、両岸に埋め込んだ桁などの土中部分の長さが微妙に違う事実が明らかになったのだ。

例えば、最下段の一の桁。嘉永の資料では土中部分が八・六三メートルあるはずなのに、解体した橋は三・九〇メートルで、四・七三メートルも短かった。他の桁、行桁（ゆきげた）などもそれぞれ寸足らずだった。

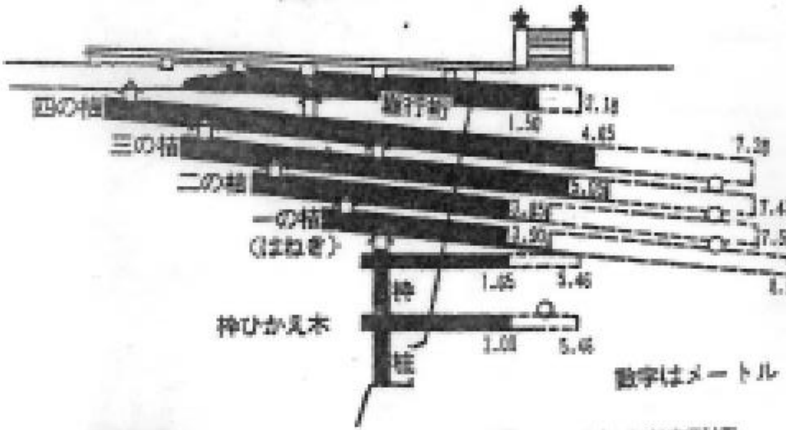
前回の架け替えでは、猿橋の規模、構造を論ずる嘉永の記録がなく、明治の橋を忠実に再現しただけ。当時設計を担当した[illegible]（いずみ）さんも（県文化財保護審議委員）の話では「[illegible]はっきりしていない」。つまり明治の橋も寸足らずだった。

明治の架け替えの際に資材不足で短くしたのか。ひょっとしたら嘉永の工事にあたった村方たちが出来形帳で[illegible]のか。そうした疑問を解く[illegible]、先人たちの名誉のためにあえていえば、それは「狭い嘉永」の問題でもある。

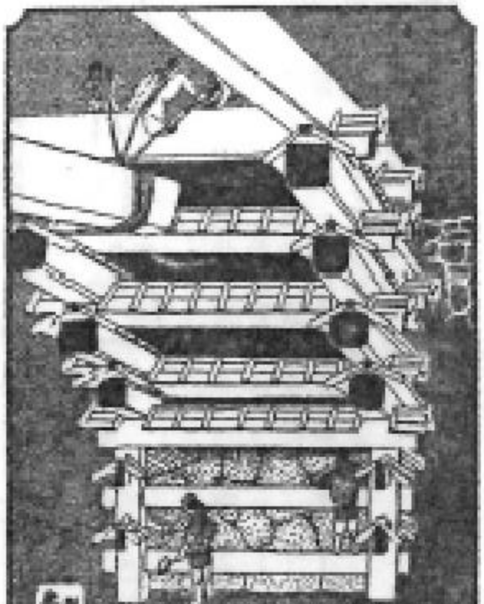
嘉永の[illegible]の出来形帳にあるように両岸が[illegible]いのだ。そこで市教育委員会の[illegible]さんは一つの仮説を立てる。「嘉永の当時、役人の目をごまかして架け替えを行うなど、とても考えられない。明治以前の猿橋はそうした上部だったのではないか」と。

嘉永に設計変更をしたのか、すべての真相はいまのところ分かりはしない。が、ともあれ、新猿橋は〝嘉永の姿〟を三年後に[illegible]付けるはずだ。

嘉永と昭和の違い



■ 昭和24年の 架け替え図面　［ ］ 嘉永4年の出来形帳



△嘉永の架け替えの図面の控えが残る。柱に二本桁が……この時代の特徴

嘉永の出来形帳と前の橋

昭和の橋

ふるさと探訪

第一部・猛獣物語

<14>

台湾ヒノキを外皮に

新建材の強度実験＝竹中工務店研究所で

H形鋼に新手法で

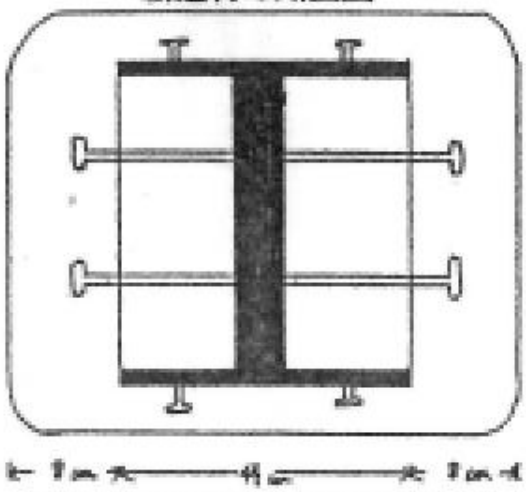
昭和の橋 ⑭

"新木造"は始まったものの、建材の選択には苦労が絶えなかった。

最初の場合、中央の行桁（けた）三本は、直径九間（約十六メートル）、一尺（約六十センチ）角の柱（はしら）にしても、横木は四の間はなかなかはり九間で、一尺八寸（約五十四センチ）角になる。強度からいって木材はケヤキかクリ材が理想しいが、こんな長木は国内のどこを探しても無かった。文部省は力ナダ、オーストラリアなど海外まで材探したらしいが、ダメだった。既くらの山からケヤキ材が出た頃も、構造のことはもう設計が進っていた。

鉄筋の場合は、もう二つ難しい問題を抱えかけた。つまり二、三十年前にまた繰り返ることを前提としては、手間が掛かりすぎるのだ。それもこれもで、今回はちょっと変わった手法が採用された。材料や構造には「H形鋼」を台湾ヒノキで巻き込んだ"新建材"を使うことになったのだ。

新建材の断面図



（注）H形鋼を台湾ヒノキ材で巻きボルトで固定する。サイズは最も大きい行桁用。

木造の宿命。これが名勝・猛獣の命を奪う以上、鉄材を使う訳わけにはいかない。台湾ヒノキで巻くのは、とても高価な木材の外皮を張る所の別だった。コストもケヤキ材の六分の一程度である。「材料不足、手間の命を奪う以上、鉄材を使う訳わけにはいかない。台湾ヒノキで巻くのは、とても高価な木材の外皮を張る所の別だった。コストもケヤキ材の六分の一程度である。「材料不足、手間不足の中で、何とかこの橋独特のデザイン、構造を後世に残したい。H形鋼の導入は、いわば苦肉の策。物でもあるわけです」と、修理者側の市川治（ま）

しかもこの"新建材"は、新たとして高性能を秘めたものであるとも言えるのだ。

この"新建材"については、財団法人「建材試験センター」（東京）で試験して、入念な強度試験を実施した。建材部長は十ヶ月間にわたり試験を繰り返した。

「とにかく強度ちゃんと出ること」が第一の目的になっていた。H形鋼は半永久的だが、今後は"新建材"でなく、"新建材"ということになるでしょう」

何ともはなはだ新しい昭和の橋は、日本をとりまく国際情勢に関係なく、大成功を収めた。

（つ）日光東照宮は解説する。

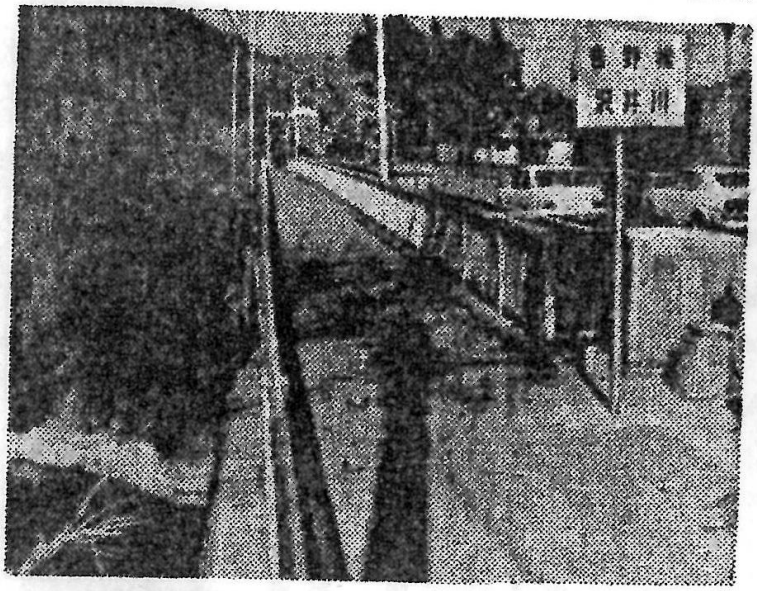
昭和の橋

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

<15>

今回の架け替えに、さまざまな影を投げた嘉永四年（一八五一）の出来形帳をもう一度思い出していただきたい。それは「甲州道中猿橋宿地内字大猿橋掛替御普請出来形帳」とあった。つまり当時の人は、奇橋を〝大猿橋〟と呼んだ。とすれば、どこかに〝小猿橋〟もあったのだろうか。



昔の小猿橋はここにあった（甲州街道吉野橋）

それは確かにあった。同じ甲州街道の吉野宿（現在の神奈川県津久井郡藤野町）で、相模川の支流、沢井川に明治初めのころまでかかっていたことが、地元の郷土史家の話から明らかになった。

町文化財保護委員の吉野甫（はじめ）さん（六二）。古くから吉野宿の本陣をつとめた家柄。数年前、自宅の古い蔵に保管されていた本陣の記録を調べていて、小猿橋（こさるはし）にぶつかった。

余話（小猿橋）

今の吉野橋近く 吉野さんが解読

本陣の記録に残る

長さ十四間（約二十五㍍）、幅は不明だが、水面からの高さは五丈（約十五㍍）。幾分小ぶりながら、両岸から木材をはね出し、甲斐の猿橋と似た奇橋をしていたらしい。

架け替えの歴史も記録されており、古くは元禄十一年（一六九八）、徳川幕府の普請奉行から四百両の架け替え費用が支給された。そのあと宝永六年（一七〇九）が四百五十両、元文五年（一七四〇）三百七十四両、宝暦六年（一七五六）四百六十四両、安政二年（一八五五）百九十両、元治元年（一八六四）七十両と続いた。

近在から豊富にケヤキ材の出た甲斐の猿橋と違い、こちらは建材を購入したらしい。だから架け替え費用の工面には苦労したようで、人馬通行の〝橋銭〟、旅宿やそこで働く女性（飯盛り女といった）から税金をとったことが記録されていた。

その後明治十年ごろ、上流五百㍍あたりに別の新猿橋が架けられ、小猿橋の名は歴史から消えてしまった。現在の甲州街道の吉野橋が、かつて小猿橋のあった場所といわれるが、もう知る人は少ない。

甲州街道の大小二つの猿橋。名前が同じなら、構法も似ていた？「同じ時期に、同じような技術集団が架けたのでしょうか」。吉野さんも首をかしげる。

小猿橋の歴史を調べた吉野さん

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

<16>

撤去されるか心配

夏の縁日に 座布団の山

猿橋のたもとに、山王宮という小さなほこらがある。架橋伝説にちなみ、白猿のご神体が祭ってあると、昔から言い伝えられてきた。

戦前の話だが、ある時、地元の人々はそっとほこらを改めてみて、驚いた。ご神体がなかった。何者かが持ち出したのか、もともとなかったのか。ともあれ、「大黒屋旅館」の先代が身延山の仏像師に頼んで白猿の木像を彫ってもらい、入魂して祭り、崇なきを得た。

猿橋の陰はこの〝お山王さま〟のみりで彩られる。その年に子供の生まれた家々が、大小さまざまな座布団を寄進するのがしきたり。その座布団を積み上げ、てっぺんにご神体を乗せた風変わりなみこしが街角をねり歩く。

毎年七月の二十日前後に繰り広げられるこの風物詩、地元の人たちと猿橋との〝心の通い〟を物語る。が、その由緒ある山王宮のそばで、十数年前、実はひと騒動あった。

ある日のこと。山王宮のわきに奇妙な社（やしろ）が突然出現した。「猿覚善大神」と染め抜いた数本ののぼりがはためき、その縁起には、昔、身延山に向かっていた日蓮上人が北条家の武士に追われて困っていた時、白猿どもが渓谷に集まって橋を作り、上人を救ったとのエピソードが記されていた。建立者は石和町出身の熱心な日蓮宗信者とわかった。

地元は驚いた。そんないわれは聞かないし、そもそも社が建立される話をだれも知らなかったからだ。「それでもねェ、随分奇特な話と思って、みんなが集まり、お祝いまでしたもんです」。猿橋のたもとに住む水島義雄さん（七〇）が述懐する。

この社の建立、実は地元の一部に話はあったらしいが、名勝・猿橋を管理する県や市には何の相談もなかった。つまり国の名勝指定区域に、無断で建てられた。市の文化財審議委員会で論議になり、県当局も撤去を要請する騒ぎになった。しかし、何となく恐れ多く、だれも手をつけないまま今日にいたっている。

市教委は「猿橋にゆかりのない建造物であることは確か。新しい橋が完成して、周辺の環境整備を行う時、やはりその撤去を検討せざるを得ないでしょう」と語る。

「猿覚善大神」、その行方は微妙である。

論議のマト、猿橋のたもとにある猿覚善大神

余話（お山王さま）

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

〈17〉

鉄砲水の危機超す

54年の台風20号 記録的集中豪雨

〈余話〉桂川の流れ

〝昭和の橋〟架け替えが動き出していた五十四年十月。名勝・猿橋に流失の危機があった。紀伊半島に上陸した台風二十号が日本列島を縦断、各地に記録的な集中豪雨をもたらした。桂川上流に降った雨は〝鉄砲水〟となって押し寄せた。川幅が極端に狭くなる地形も手伝って、渓谷の水かさはみるみる増し、激流が高さ三十㍍の猿橋に迫った。

先人たちが残してくれた貴重な財産をついに流してしまうかと、工事関係者らも一時は肝を冷やした。が、谷間のてっぺんに橋脚もなしに建てられた奇橋のおかげで、かろうじて流失を免れた。

「五十年も猿橋を見てきたが、あんな〝鉄砲水〟はあまり記憶がありません」。大黒屋旅館のおばあちゃん佐藤栄子さん(七〇)が当時を振りかえる。それもそのはずで、近年は「桂川の水が減った」というのが地元の偽らざる実感だった。

橋の北側で、昭和十八年から開業している歯科医渥山兵太さん(七〇)。カメラが好きで、おりおりの猿橋を撮り続けてきた。二十年ほど前、初夏のスナップが県の写真コンクールで三席に入選したことがある。

「もうひと昔前の話ですが、アメリカの観光案内に〝モンキーブリッジ〟とありましてね。これは捨てたものじゃないと、急に猿橋が大きく見えました。でも、当時は桂川の水はもっと豊かだったなあ」

渓流に小舟を浮かべて、観光客がアユ釣りを楽しんだり、灯ろう流しをしたりした風情はもう見られない。

桂川本流の水は、上流の都留市川茂で東電が、明治四十年から発電用として毎秒二十五㍑取水している。だから猿橋あたりを流れるのは、途中で合流する葛野(かずの)川の水といってよい。ところが、その水が近年急激に枯れてきたという。

かつて葛野の架け替えの時、豊富なケヤキ材を出した葛野川上流の小金沢山一帯も、戦時中の乱伐がたたって見るカゲもない。さらに沿岸の都市化が進んで、降れば〝鉄砲水〟、あとはカラカラ。これは開発に伴う裏腹の現象なのだ。

その川に生きる桂川漁協(西宰覚組合長)。六月のアユ解禁に備えて稚アユの放流などに忙しいが、関係者は「水量が少ないせいか、ヤマベなどは食いが悪いと不評を買う。それに最近は、家庭排水などで水の汚れも目立ってきた。困ったものです」と嘆く。

猿橋の下を流れる桂川。そこにも時代の波は容赦なく押し寄せる。

小舟が浮かぶ桂川渓谷。水も豊富だった。明治に架けた猿橋がかすむ

ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

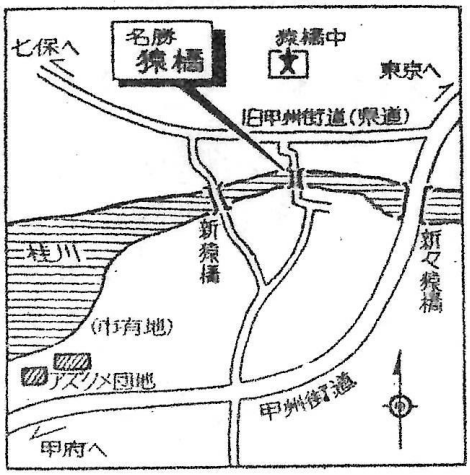
<18>

財産の象徴を音読みに

「去る」では縁起悪い

名勝・猿橋は、地元にとっていつの時代も橋はこの地の代名かけがえのない財産であり、象詞だった。

猿橋付近の略図



えんきょうの町

(上)

名が先か」の議論はともかく、

甲州道中猿橋宿として知られた北都留郡大原村は、昭和十年の町制施行で猿橋町となった。郡役所を擁し、郡内随一の観光、商業地として栄えた。だから二十九年八月、近隣七か町村が合併して、現在の大月市が誕生した際にも、地元には強い抵抗があった。

「猿橋の人々にショックだったのは、市役所が広里村（現在の大月市中心地）に移ることでした。こっちに合併して〝猿橋市を〟なんて声まであったほどですから……」先にも登場願った当時の町総務課長田中福次郎さん(六九)が述懐する。

古い土地の人々は、橋は「さるはし」と呼びながら、地名の方は「えんきょう」と音読みする。「さるはし」は「去る」に通じて縁起が悪いとかで、そうなったという。いつのころからかはっきりしないが、人々が「私は〝えんきょう〟の生まれで……」などという時は、つねに誇らしげである。

もっとも天下の奇橋を持つプライド、自信が裏目に出て、結局は町の衰退を招いた面がないわけではない。

それは昭和初めの話だ。国鉄中央線と富士山ろくを結ぶ富士急行線は、当初猿橋を起点とする構想があった。が、橋で栄える地元は「客が逃げる」と猛反対、結局、同線は当時の広里村の駅（現在の大月駅）を起点に同四年営業開始となった。

「それだけじゃない。地元の猿橋駅開設の時にも反対があって、駅を町はずれに追いやってしまったと聞いている。昔から街道と橋で生きてきた人々には、鉄道の価値がわからなかったんでしょうなあ」。地元の顔役の一人はこういって嘆息した。

猿橋のおかげで発展した町の中心街

猿橋の衰退に追い打ちをかけたのが中央道。四十四年春、東京―河口湖間が開通すると富士方面に向かう観光バス、マイカーは素通り。長い間猿橋を支えてきた甲州街道が〝地盤沈下〟を始めてしまった。

それだけに二年後に完成する〝昭和の橋〟に寄せる地元の期待は大きい。「いまでも休日には観光客が結構あるんです。でも、猿橋がなくてガッカリしている姿を見ると気の毒で……。架け替え工事がまどろっこしいくらいです」と猿橋観光協会長の佐藤友信さん(五〇)。

ふるさと猿橋

第一部・猿橋物語

<19>

江戸の姿再現に夢

民俗資料館作り

猿橋コーナーも

名勝・猿橋。もう何百年か、人々が汗を流し、知恵をしぼって今日まで守ってきた天下の奇橋。〝昭和のなくみ〟たちの手で、百三十年前の江戸の姿が再現される日も、そう遠いことではない。

甲州街道の橋としての役目を終えたいまも、猿橋はまだレッキとした公道（市道）の橋。だが、大月市は今回の架け替えを機に純粋な〝名勝の橋〟と位置付け、人間以外の通行を規制する傾向だ。

同じ名勝でも錦帯橋（山口県岩国市）の場合、観光客などから入橋料、つまり橋の渡り賃（大人一人百円）を取り、橋の管理、補修費にあてている。日常の管理費の面倒を見ない文化財行政のもとでは、それもアイデアだが、大月市教委は「昔から一般の道路で、〝橋銭〟をとったなんて話は聞かないので……」と、有料化には消極的。

名勝・猿橋の最大の悩みは駐車場難。橋のたもとに観光バスやマイカーの駐車ができるスペースがなく、せっかく訪れた観光客も橋の奇構や渓谷美をゆっくり観賞できない。〝猿橋離れ〟の一因にもなっていた。

そこで市は五、六百メートル上流のアズクメ団地付近の市有地を駐車場に開放し、ここから桂川べりを猿橋まで散策するプロムナードの整備を内々に検討している。これだと、駐車難は解消し、観光客は渓谷と橋を同時に楽しめるわけで、地元にも実現を期待する声が強い。

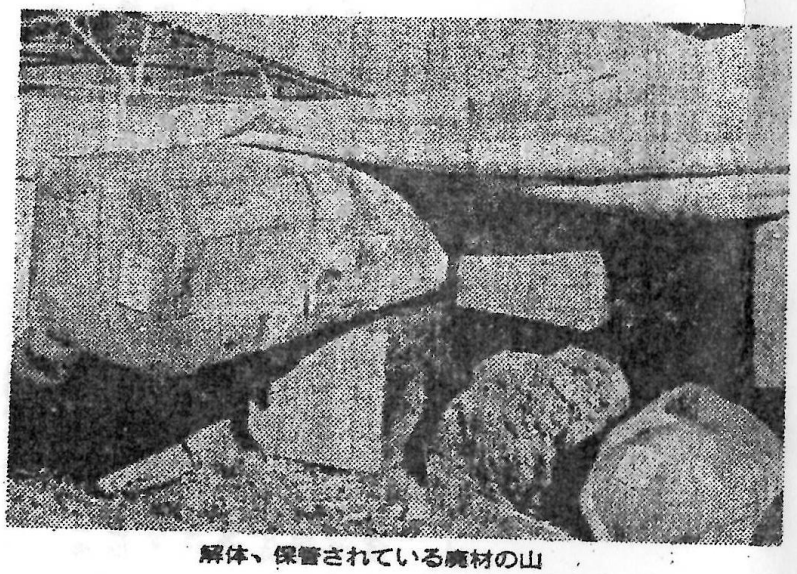
この前の架け替えは旧猿橋町の時代の話。大月市になってからは今回が初の架け替えで、猿橋は〝えんきょうの町〟の財産から市民全体の財産になる。そこで市教委は、いくつかの夢を描く。

ひとつは市の民俗資料館を作り、そこに猿橋コーナーを設けることだ。民俗資料館は、今年度ようやく調査費がつき、建設準備にはいったばかりだが、名勝・猿橋を知る施設がまったくなかっただけに、市民や観光客には喜ばれそうだ。

もう一つは、ばく大な市費を投じた架け替えの足跡を何らかの形で残すことだ。市教委は解体し、保管中の古い橋の廃材の活用を考える。

もっともこれまでの架け替えの記録では使える部分は使うのが慣習のようで、文化庁などは今回もこれを踏襲する考えだ。

「でも、それはごく一部でしょ。廃材の中には江戸のころのものと見られるクリ材などもある。払い下げてもらって、全戸に表札でもプレゼントしたらいい記念になるんじゃないかな。もっともこれは、私の勝手な夢ですがね」。市教育長の大沢良作さん（六六）は笑った。（おわり）



解体、保管されている廃材の山

えんきょうの町 ㊦